

二足の草鞋僧としてのわが行動軌跡

林 山 峯 雄

(兵庫県社会福祉事業団事務局主査)

一、転 勤

今春三月末、私はひとつの電話連絡によって、自分の社会福祉業務の対象範囲が一举に拡大するのを知った。

すなわち、兵庫県社会福祉事業団事務局指導課への転勤命令を受けたのである。

兵庫県社会福祉事業団という各種社会福祉施設二十五(九月一日現在)を併せ持つ公立民営の社会福祉団体に就労している以上、いずれはこんなこともあるかも知れぬとの虞を抱いてはいたものの、それでもなお、私にとっては、この転勤は唐突であり、思いもかけぬ事態発生にはかならなかった。

なにしろ、それ迄の私は、淡路島にある五色精光園という

精神薄弱児者収容施設の、そのまた児童寮のみという、極めて限定された職場の中で、施設創設以来十三年間、ひたすら精神薄弱児を対象として業務精励してきたに過ぎなかったからである。

私が、可能な限り淡路島の精神薄弱児施設勤務を、執拗に希望してきた背景には、私がかつとも精神薄弱児者指導に局限した職員養成機関出身であったという、いわば資質的制約を受けていたこと、さらには、私が現に淡路島南部にある真言宗寺院住職でもあるという、地理的もしくは個人環境的制約を大きく受けていたことが、何といっても大きい。

つまり、私は言うところの二足の草鞋僧なのである。

ちなみに、私の住職歴はというと、高野山大学を卒業する

や否やからであるから、まる十四年経過したところである。

話のついでに、茅舎の檀家数を紹介しておくが、これは百五十余という数字を提示しなければならぬ。つまり、当地の寺院経済的要請からすれば、どこかへ勤めねば、まず清僧として一生不犯のまま過さねばならない窮屈な状況下にある。

そういう出家らしき聖の道を、この私にせよ志向しなかったわけではない。実のところ、大学在学中に、ほんの瞬間的ではあるが、深刻かつ真摯に、その考えをよぎらせたこともある。……が、爾来幾春秋、現在は母に加えて妻プラス子供三人という、当節の平均家族数を遙かに越えた状態を世間にさらしている仕末である。

いずれにせよ、かくの如き状態で、私としては、五色精光園という職場ほど、わが個人的状況にとっては、タイムリーに創設され、通勤等にも好都合で、恵まれたところは無かつたのである。

従って、この状態を可能な限り継続せしめようとしたのは、凡僧の常として、無理からぬところであつた。もつとも、この状態に、私はただ安閑としていたわけではない。すなわち、これらわが制約に即応した形で、精神薄弱児指導のスペシャ

リストをめざし、日常業務に精励し、関連せる参考資料や専攻論文類を、個人のレベルとして相当多量に収集し、また施設現場職員としての姿勢や自覚も人一倍持ち、その専門性を追究、研鑽し続けてきたつもりである。

ところへ、この転勤騒ぎである。私の施設現場職員生活は中断し、私にとっての多量かつ多額の物心ともなる投資は、宙に浮き、暫し(?)頓座の憂目に会った形なのである。

最近、私は稿を求められ、「転勤騒動顛末記」と自己に対して一種の揶揄を試みたほどである。しかし、このことについてまでも拘泥しては、箭喩経の喩えの通りである。いや、より適切に言えば、現実的な事態に即刻対応せざるを得なかったのである。

淡路島から神戸への通勤(半数は神戸の仮寓に宿泊せざるを得ない)は、順調にいつても二時間半かかる。かてて加えて、精神薄弱児指導以外の、例えば情緒障害児治療、各種老人福祉、あるいは身体障害者の各種リハビリ等々については、何も知らなかったときている。これでは、私自身心身症になるばかりであつた。事実、転勤後まもなくの私はそれに近かつた。

ともあれ、この転動を契機として、施設運営といった従来従的に考えていた態度を逆に前面に押し出してみつめる必要性、つまりは、物事を相当異なる視座から見する必要性を一入強く感じさせられたのである。しかし、視座や視野というものはそうしたやすく変り、拡がるものでもないようだ。いや却って、従前の指導現場オンリーの発想に拘泥して、いちいちの判断に躊躇逡巡し、ともすれば違和感や戸惑いの感覚を募らせがちである。このさきも、相当その連続に苦しみそうである。

ある意味では、仏教用語で言うところのくんじんしゅう、くんじんしゅうを、施設現場生活の中で、受けているからとも言えよう。

私自身は、私のこの現場優先主義を勿論放棄するつもりは毛頭ないが、それはそれとしても、事務局指導課に属する職責上、従来とは相当見方を異にせざるを得ない機会も多いと覚悟している。……かくなる上は、社会福祉全般にオール・ラウンドに通曉し、いわゆる複眼的な、かつ可塑性にみちた現実的思考、行動等でもって、実的に多様に対応すること必要であるわけである。それにしても、いきなり福祉ゼネラリストの道を歩まされて、戸惑うばかりであった。

かくの如くして、私の二足の草鞋は、慌てふためくことにより、いずれも破れ気味となり、しかも三足も四足も同時に履くような困難さに直面し、心身とも疲労困憊の情ない支離滅裂な生きざまに明け暮れ、日々あえぎ、あえぎ過ぎざるを得なかったのである。

辛い勤務五、六ヶ月に及び、ようやく名状し難い深刻さから脱け出て、現在の職場の業務内容にも少しずつ適応してきただころである。これにつれて、これはこれで意外と面白いところもあると発見しはじめたところである。それは、転勤後三、四ヶ月にしてどうにかまとめあげた五十ページ足らずの情緒障害児短期収容治療施設の運営考のレポート作成（これは、にわか勉強もいところの孤独で苦しい作業の連続であった）をはじめとして、管下老人施設の実状調査参画、あるいは、身体障害者更生センター開設準備考参画等々を通して感じ始めた感覚であり、当面の私の最大課題である、管下精神薄弱児施設の将来展望考（現在、そのニード等を種々分析中）等を通して感じ始めた感覚でもある。この分でいくと、よほどのことがない限り、まずは明石海峡の藻屑と消え去ることはないであろう。いやそれどころか、よくしたもので、

日がたつにつれて、妻も子も母も、そして檀家も、わが背中に背負い、明石海峡を渡れるものなら渡りたいという、瞬間的妄想に捉えられる仕末である。おそらくは自坊、職場、仮寓の長距離往来にもどかしさを感じ、また折角の休日も檀用になにはともあれあてねばならぬ慌しさに辟易しつつ、ふと芽生える迷いとも言えるのであろう。

しかし、この心理変化を、毫も檀家の人達に公言することは、はばからねばならぬのである。なぜなら、私は時既に、檀徒との交流関係をぬきさしならぬほど深く、多く積み重ねてしまった後だからである。

二、二足の草鞋僧生活

そもそも、私はかくの如き二足の草鞋生活を最初から志向したわけではない。かと言って、無上甚深微妙の機縁によって導かれたという、いわば仏教經典の表現に倣って言うには、少々おこがましい憾がある。

むしろ上述のように、寺院生活のみでは到底経済的に成立し得ないという、俗な坊主の現実性の然らしめた結果であったと言うのが最も正確なところであろう。つまり、いわば貧

乏寺におかれた状況下より、必要悪的な感覚で選択を余儀なくされたと言う方が、よりの確な事実描写なのである。

今となつては杳としたところもあるが、それも、住職―主、何らかの職業―副、という生活態度を既に大学入学当初より希求せざるを得なかったような記憶がある。

もつとも、上に述べきいたような二重の生活を開始してまもなく、そうした主副といった意識は失われ、いずれもが主であり、また主でなければならぬという意識に变革していくのを、自分自身でよく認識し得たものである。この故に、人から「どちらが本職ですか」と聴かれると、「どちらもそうです」と答えざるを得ないのである。たまたま双方の職業領域は、幸運にも、究極のところ、生き生きと人間と触れ合うという点で共通したところがあり、また、その双方の業務内容は私を媒介項として、補完もしくは補正し合うような相互賦活化の作用を果している幸福さがあったのである。

このようなわけで、二足の草鞋僧としての生活理念と言うべきものは、現実の二足の草鞋僧となる以前から持たざるを得なかったであり、それも寺院住職たるものは、世間の人と同じく生々しく社会参加の一形式（非宗教的職業）をとら

ねばならないと、早くから明確に考えてもいたのであった。それのみか、そうした社会参加の形式を経験してこそ、はじめて檀家の人達とも、まっとうに人間的な触れ合いを展開し合えると思うにも至っていたのであった。

つまり、これを構造的図式で表現すれば、「何らかの職業人十宗教的活動にやや専門的知識を有したり、実践的行為をなす人間——魂との触れ合いも可能な住職」ということになるかと思うが、この私の考え方は、在家仏教主義的なものにも多大の影響を受けていると言えるであろう。

かくして、学生時代から持っていたこの生活理念は、二足の草鞋を実際に履きはじめるにつれて、ますます強固な信念と化し、漸次私自身の中で、これら二つの業務が統合、止場されていくような実感をもつに至ったのである。のみならず、同時に、極めて世俗的な話になるが、檀家の人達にただひたすら一方的に養われているという、経済的庇護感、すなわち屈辱感からも脱出できて、私はようやくくにして、檀家の人達と負目のない対等な人間関係を可能にしたのである。兵庫県社会福祉事業団に就職後、はじめて得た給料を手にした時、私はこれからこそ、まっとうな宗教的活動も可能となると、

極めて爽快な気分を味わったものである。これは、現行の檀家と寺院との経済的關係、なかんずく人の不幸時に、なにがしかの金銭を受けることの多い職業システムを熟知している人には、よくわかっていただける微妙で重厚な感情である。

もっとも、以上述べきいた二足の草鞋僧たる条件をみたすためには、巷間で定着気味な、いずれの分野においても、中途半端だ、という、二足の草鞋僧への批判の射程から、常に遠く隔て続けねばならないのは勿論である。つまり、そのへんの低レベルで躓いていては、私の志向する住職像は、その前提から脆くも崩壊しかかるのである。このことは、当然、私を精神的にも肉体的にも規制し続けている。いやそれどころか、まかり間違えば、二重生活者のレベルで、自らを分解、破滅させてしまう危うささであるのである。実にこのへんは、私の永遠の課題でもあるわけだ。

卑近な日常性に即して言えば、出張や会議日には、葬儀発生の報無きことを専ら祈り（この私の事情を檀家の人達も気づかってくれたのか、実に本年の一月から八月まで一人も幽明境を異にすることはなかった）、普段の執務日にしても、少々の風邪や不快症状に罹っても、絶対に年休等をとろうと

しない器量の狭少な出勤ぶりに連動するのである。これは、ただに生来の気弱な(?)パーソナリティーばかりのなし得るところではなく、むしろ、そうした巷間の批判をかわすさやかな抗いともなっている筈である。以上のようなわけで、やや漫画的に言えば、大言壮語、大ボラを吹いて業務を大胆にやるという蛮勇は、聊か生じにくくなっているのである。

このへんの生真面目さと萎縮性への小人的傾向は、二重生活者たる私の限界でもあり、つまらなさでもある。そのことは、何あろう私自身がイライラしつつ、しかと認識し、感じとっている限界である。つまり、批判の射程から常に遠く隔て続けるだけでは、いずれの分野でも良い業務はなしがたいことも、この転動を通じて一層よく分らされたのである。しかし、このへんになると努力といった類をこえた曰く言い難いものが作用するようだ。

三、社会福祉への道

このように寺院住職でありながら、もう一方の社会参加の一形式として選んだのが、ほかならぬ社会福祉施設の職員であったわけであるが、こうして拙文を読み進めてこられた方

は、既に私が崇高なる宗教的情動に駆られて、こうした職業を選択したのではないことを察知されたことであろう。

それはその通りであって、社会福祉業務へのわが導入道程というものは、まったく摩訶不思議な人の縁の積み重ねによるというほかない。敢て抹香臭く言えば、仏縁とでも言えるのかも知れない。

私はもともと高野山大学では、密教学を専攻していた男である。それも、大学二年の頃からチベットやインドの密教に注目し、松長有慶教授(現学長)の御自宅等に出入りして、民族学、民俗学、図像学、考古学等々の仏教学の周辺もしくは近接領域の諸文献なども漁り、独学的に考究した記憶がある。自分で言うのもおかしいが、今でもたちどころに数多くの欧米の学者や著書名も思いおこせるほどである。今も辞書と首つびきになってこれら文献と悪戦苦闘した、いかにも背伸びした日々を懐しく思い起すこともある。最近も、神戸の書店で、この方面の新刊書を手に取って見たが、一向にドラマチックに進展をしない学問のありさまをものかしく思ったり、当時自分が感覚的に把握し得ていたこと(実証的というには、余りにも未熟な文献操作しかなし得なかった)が、

そう的是でなかつたことを確認してホット安堵感を抱いたところである。私はいわば外野席からながめている者にすぎないのであるが、この種の学問進捗状況については常に注目し、いつまでも熱烈な声援を送り続けている一人なのである。

このようなわけで、宗門大学卒業後は、或る国立大学の大学院にでも行って、更に密教を学問的に研究したいと願っていたほどである。しかし、それも住職であつた父を中学二年生の時に亡している等の家庭事情によつてかなえられなかつた経緯がある。

その心情たるや、今も心中で無念さと後悔の念とでもつて疼かせるところがあるほどである。とりわけ、この種の専攻論文を読んだ時の如上のような複雑な感情反応には、自分でも驚くことがある。不勉強を棚にあげてのこの執念深さは、いつ迄も悟れぬ僧ぶりを証明して余りあるわけである。おそらく、心理的な外傷性体験を深刻に受けたためであろう。

ところで卒業後、直ちに帰坊したかと言うとそうでもない。それは、ひとつには、田舎の故に、なかなか適当な職場が見つからなかつたこともある。なにしろ、当地での住職の兼職

先はと言うと、教員か町等の公務員か農協の職員かが相場であつたのであるが、いずれも採用計画が無かつたり、何故か私自身が余りその気にならなかつたので、未決定のままズルズルと延伸してしまつたわけである。後々、兵庫県社会福祉事業団（五色精光園）というそれらに比して、給与が低いか、労働条件が厳しいかのところにわが身を置いたわけで、皮肉なものであつたと思う。あれほど忌み嫌つていた教員にせよ、採用試験ぐらゐは受けても良かったのではないかと後にふと思ふこともあつたほどである。

どうも、あの頃の私は、何事にも今以上にチグハグな行動が多かつたのである。いわゆる見通しというものが無かつたためであろう。それにしても、あのように上級学校への進学が閉ざされていたにもかかわらず、就職も決めず無為に過していたのは、「帰坊すれば、とりあえずはなんとか糊口をしのげる」という宗門大生の進路に対する雰囲気、つい私も感化を受けていたのである。

こうした私の状況を見かねた中国哲学専攻の加地伸行講師（現大阪大助教授）は、厚生省（？）におられたお兄さんのルートで、国立秩父学園付属保護指導職員養成所という特殊

な、厚生省管轄下の養成機関をわざわざ捜して下さり、「お寺の坊さんやから、ケース・ワーカーなど地域に奉仕できるものがええのと違うか。」云々と受験をお薦め下さったのである。ところが、当時の私は、ケース・ワーカーの仕事がどんなものであるのか、正直なところ余り理解もしていなかったで、曖昧な返事しか返せなかった記憶がある。

先生には内密にした形で、冬のある日東京見物がてら所沢に旅立ったのであるが、その養成所は、秩父学園という国立の精神薄弱者施設の敷地内にあった。受験日いきなり出会った園生のまるで異様な様子には、本当に「こんな人もいたのか——」とカウンター・パンチを受けたように驚かされたものである。実は、その印象は、今この文章を書く段になって、忽然と思ひ起したのである。それほど、以来、精神薄弱者との交流は、私には日常的になっていて、その鮮明たりし印象も漠然たる彼方に埋没させていたのである。

幸い入所し得たものの、この養成所は、名の通り精神薄弱者施設現場職員としてのオール・ラウンドな知識を獲得するためのなんとも奇妙なところであった。……思えば、孝橋正一教授の著わされた仏教と社会福祉に関する論文等々にも大

いに啓発されるなど、私にとっては極めて感じやすい時代であった。

その後、種々の紆余曲折を経て、福祉施設職場にその職を得る気になっていくわけであるが、それにしても、雑多な学部卒業者集団のかもす舐め行為は、当時の私の思考を刺激、訓練するには、そしてまた、多少なりともマルチプル人間化しておくには、効果があつた。

なお、それにしても、わが養成所終了と共に、五色精光園が創設されるとは、これまたなんたる僥倖であつたことであろう。

四、檀家の人の目

ところが、このような私の個人的な経緯とは無関係に檀家の人達には、私の職業選択動機を、宗教的行為の発露の結果だと想像したがる人も少なくなく、いちいち訂正するのにやっ気になったこともある。この誤解は檀家の人の信望を得るという点で、私自身にとってまことに好都合なようであつたが、その実、虚像を生み出し、却ってそれらの人達との生々しい交流をするには、支障となるように感じられ、無視でき

なかったのである。

檀家の人達との關係は、けっしてそうした尊敬を得るようないわゆる上下關係で果せるものではないと思う。むしろ、日々罪深きことを積み重ね、悩み多き人生をおめおめと生き抜く、その次元で、共に檀家の人達と話し合ったり、考え込んだりする共感性あるいは共存性でもってこそ、民主主義時代下の教化や伝道がなされるべきであると思う。こうした生き方というものは、私にとっては、あきらかに密教学に触れているうちに得た態度と、自己回想することが可能である。

にもかくにも、宗教とは、そんな安直な形で表面化するべきものではないという固定觀念らしきものが、私にはあるのだ。

従つて、私はけっして慈善思想でこの職に就いたのではない。いやむしろ、そうした隣憫の情は、こうした社会福祉の発展に桎梏になるものとして、最も忌み嫌ひ続けたものである。

なにしろ、『福祉』は、けっしてそんな慈善思想や祈りだけでは救われないと考えていたからである。いやそれどころか、科学的な政策が国家という規模の土壤でなされてこそ、

はじめてその機能が、ひとつひとつ花咲くことを生理的感覚で確信していたからである。もつとも、この政策を支えるのはほかならぬ「思いやり」というやさしい人の心情であることは知っていた。つまり、われわれ仏教徒の言葉でいえば、^{ぶつしやう}仏性ということになるかと思う。これを心底から発露した時、その花は造花でない本当の輝きと香りをもたらしものであるとは思っていた。

五、至難な仏性の発露

時は流れたが、現在はどうだろう。いまだに造花くさい現実にあるではないか。——いや、その花数もまったく十全ではない。特に『福祉元年』やら『障害者年』の快い唄い文句が巷に喧伝されてから、僅かの後に、財政難という烈風に吹きさらされて、それらの唄い文句もすっかり雲散霧消の体と相成った。それからというものは、まるで時代進行している感さえあるほどである。

また、われわれ日本人が誇りとしてきた、やさしい心情にも、翳りがみられ、残虐極まりない事件が続々と勃発するに至つて、私ども寺院住職の責任も問われ続けているほどだ。

(いやそれでもないかも知れない。それどころか、まるであてにさえされていないと言う方が正しいかも知れない。)はつきり言つて、仏教は素晴らしい教えを持つてはいても、そのにない、手たるものがわれわれのような凡僧ばかりで、その機能を十全に發揮し得てないのである。

このへんは、残念ながら、ヨーロッパのような先進国の宗教家のインテリジェンスに溢れた行儀良さ、あるいは、中東やインドのような後進国の力強い宗教家像とは、大いなる相違がある。

もつとも、十年ほど前に瞥見したヨーロッパの福祉施設における、宗教的規範に縛られすぎた子供への非科学的なタッチぶり、あるいは、子供とドロコンコになって走り廻らなければならぬ職員が、長々とした神父やシスターの僧服を着用して仕事している様子など、理解に苦しむ光景を見た記憶もある。……あれなど、子供と交わることを宗教儀礼の延長として捉えるやり方であり、いくら形式が内容を規定、もしくは、充実化していく事実があるとはいえ、論理が逆立ちしていると思われた例である。これらのことは、私が仏教系のみならず、すべての、宗教を極度に前面に押し出した福祉施設

を、どうも好きにさせない原因になっている。

しかし、大局的に見れば、それら論理の顛倒も、比較的小さな瑕疵と言えるかも知れない。やはり、思いやりの心情(↓宗教心)は、かの地では確かにすっかり根づいているように思われる。これが、われわれ仏教国的日本には、ある時代から急速に欠落しているように思われるのである。もしわれわれ日本に、今もあるとしても、それは、大抵の場合は、いわば表面的な、情動的なレベルでしか發揮し切れていない事実を挙げることができる筈である。つまり、素晴らしき教えも、具体的な行動には、十全にあらわし切れていない憾みがあるというのが、私の見方なのである。

六、精神薄弱児施設で出会った子供達に 学んだこと

以来、十三年間、私は五色精光園・児童寮という生活区で、児童指導員としてさまざまな子供達と出会いを重ね、種々教えられてきた。

癲癇発作てんかんの嵐の前に、長い入院生活後、遂には瞑目したMちゃんのこと、最も悲痛な思い出として印象づけられてい

るが、この他、砂をサラサラ、サラサラとその掌からこぼすことに熱中していたM君、排水口をコップで塞ぎ、水を溜めることに専念していたT君、その水溜りを利用してビチャビチャと感覚あそびに没入していたMちゃん、カマボコ板を打ち合わせて、船や鉛筆立てを四苦八苦の未製作していたK君、粘土をまるめたり、引き伸して、その感触を固執的に楽しんでいたNさん、細編み、鎖編み、長編みのアンサンブルで、帯とも紐ともつかぬ作品をこしらえあげ、得意気に差し出したSちゃん、恰好よくホーム・ベースに滑り込んで尻もちをついたM君、特大赤ヘルをガサつかせつつ、ダイヤモンドに三角形の走行軌跡を残したTちゃん、長嶋監督よろしくブロック・サインを送り、微を頻繁にとぼしていたH君……：日によつては、昼夜の別なく泣き喚き続け、固着的に腹部に唾を塗り続けてやまなかつたS君、イージー・リスニング音楽が棟内に流れていないと、額を床にぶち続けたMさん、少なくとも二、三人の屈強の職員が介助しなければ、砂場での砂まみれ遊びからも脱け出られず、散歩にも出ようとしなかったKさん、ともすればトイレの水さえ飲みかねない反面、ニコニコと愛敬よく職員に近づき、へばりつくような抱っこを要

求し続けたYちゃん、職員監視の下でも、粘土や砂を食べるといういわゆる異食癖のあつたI君……

まかり間違えば、興味半分に読みとられがちなこうした行動特性の寸描を始めると、私には、この三月迄の子供達とのかかわりが、あの子達の歓声とともに生き生きと脳裏に甦ってくる。しかし、それにしても、子供達の自己表現は微妙で微妙で深遠だった。私には、さっぱり分らないことが多かった。おそらく、そこには、ただか一児童指導員に分かれてなるものかという、人間の尊さ、高度さが如実に物語られていたのであらう。精神薄弱児を、たまたま知能遲滞の状態に陥っている『子供』として捉え、全人格的に見ることを、さらには、交わることを二十四時間的なかわりの中から学ばせてもらったが、また稀には、ひとつの偈すら暗誦することでもできなかった愚鈍の徒、周利盤特(Cūḍapantaka)の仏典暗誦等々に、覚醒される思いもしたが、今だによくは分らないことばかりなのである。いや、永遠に私には分るまいともあれ、このように純粹で無垢な人間らしい心根をもったこれらの子供達は、私にいろいろ大切なことを教えてくれたり、気づかせてくれたのであるが、その過程の中で、私

は、子供達の発達を保障し、促すための展望を、同僚職員とともに模索し、五色精光園児童寮という施設では、

一、子供自身が、その可能性を無限に伸し得る生活環境を用意するようつとめる。

二、子供の能力等を無視した強度の訓練強要を排除するとともに、保護者や職員、そして社会の人々中心に偏した、一方向のかつて都合主義的な発想、管理、運営を排する。

三、子供自身にとって、施設の日々のプログラムが豊かで魅力あるものになるよう努力する。

四、明るく、信頼にみちた人と人との触れ合いがそこかしこに感じられる施設であるよう努力する。

の四点を大枠的な施設における最低指導留意事項として設定したものである。そしてその上で、暖かさ溢れる生活の場としての施設づくりを継続的な指導理念に掲げ、より具体的かつ詳細な指導方法を確立させ、さらには、家庭との密接な連係、地域社会との濃密な交流等々へと拡大させるなど、施設現場のリーダーの一人として、微力ながらもいろいろな形で精一杯努力したつもりである。

また、それにとどまらず、ロータリー・クラブ等の地域集

会での講演や、実習学校でのオリエンテーション講義および実習中の指導、あるいは、法要時の法話まがいの話において、さらには拙寺発行の寺誌において、子供達や勤務先に絶対迷惑をかけないよう留意しつつ啓発活動も精一杯こなつてきたつもりである。この手ごたえは、今もしかと残つてはいる。もつとも、この種の児童施設は、入所児の減という現象とともに、その社会的役割を終えたとの評価もここ二、三年急速に声高になり、現にまだ施設を必要とする子供達がいるにもかかわらず、福祉見直しの厳しい査定の下に吹きさらされ、その存続さえも危うい現状に迫いやられつつあるのだ。……

七、二足の草鞋で歩もうとする私

かくして、私の心身は慢性的な疲労に捉えられるはめに陥つていくわけである。それ故に、「忙」すなわち「心が亡ぶこと」とは、これが身辺を言い当てて妙なりと、些事にもいちいち感銘する仕末である。いずれにせよ、勤務、寺務、私事等で用件のこなし切れぬ折は、心身ともにパニック状態に陥りがちなほどである。こんな時、不遜な引き合せで恐縮だが、適応行動などにおいて障害状態像を示す精神薄弱児の

パニック状態、例えば頭を壁にぶつける自傷行動など、わが心中に忽ちかすめ、その破綻的な心理機序がある側面ですと理解できるほどである。ただ、私がそのような症状を具体的に行動表現化しないのは、ほかならぬ居直るという卑劣(?)な回避手段を知っているからであり、ひょっとして、仏教者としての精神的制御がcausingして生じるからかも知れない。(ただし、私の精神的制御は、高踏な宗教的精神作用の発露の結果ではなく、世間体を気にするという低レベルのものである。)

いずれにせよ、この多忙さから生じる仕事上のハンディーは大きいであろう。また、福祉施設利用者や同僚、そして檀家の人等にこの上ない迷惑をかけ続けたし、今後も続けていくことであろう。

しかし、社会福祉の仕事も、寺の仕事も、私にとっては捨てがたい魅力があるのだ。いやそれのみか、双方の業務内容が相互に作用し合って、それぞれの内容が豊かにされ、あるべき方向を見えやすくしてくれた体験さえ数多くないのである。こうしたいわば便宜主義的な理由づけは、自己正当化するばかりか、ひとつの仕事に専念しておられる方々への思い

もよらぬ婉曲的批判となりかねない。

しかし、私としてはそういう意図はない。ただひたすら、わがことのみを切り取っての話である。つまり、他人にはないであろう見方とか考え方とかが培われ、実践行動もなし得たと、自己領分で積極的に意義づけたいだけである。つまり一回限りの今生の自己状況を、同じことなら正当化し、双方の分野で前向きに業務精励する方が得策であろうということだけの話である。あるいはこれは、所与の状況下でのあがきのひとつとも言い得ようか。――

これらのプラグマチカルな姿勢は、私の住職観、あるいは宗教観等とも勿論深く結びついている。もっとも、住職観についてはさきに一応述べた通りである。

それでは、後者についてとなるとどうかと言うと、じっくり述べるには紙数が足らぬ。そこで、この雑文に必要なことのみしかふれられないが、そこでは、大前提的に、宗教とはあくまでも非常に個人的な精神的自主性に基づくものであり、特定の階層や集団に専有、左右される筋合いのものではない、ということ揚言するしか今は余裕がないのである。

論理を飛躍させて、いきなりまた住職観に戻るようだが、

上述の流れからいけば、自分の職業をもちつつ、その教えを信奉する個々の人々というのが、宗教人の本来の姿だとも考えられるわけである。

もっとも、いろいろな歴史的経緯や背景が累積するうちに、宗教のもつ機能や形態にも変化がなされていき、現在に至っているわけで、理念通りにはいかない、むしろいかない方がある意味では真実、もしくは、実態であるということを、素直に首肯し得る認識は、私にもある。

それを踏まえつつ述べるわけであるが、現今の寺院住職をはじめとする職業的宗教家の制度については、疑問視されるところが多いのだ。以下は、なにより自己への告発になるわけだが、私のような魂への訴え、触れ合い、ひいては救済もできぬ宗教家が、ひたすら、その宗教でもって生計を立てる矛盾があるわけだ。宗教といえども、きれいごとではない。むしろそのきれいごとでないと、宗教を支えるエネルギーも潜まれていたとも考えられるが、それにしても巷間の輿論を買う商売まがいの諸行為の続発を見るにつけ、話は別という気がする。

それらは、あくまでも、宗教の機能から一人歩きしたり、

はみ出したものに過ぎないと思う。

今はともあれ、個人としての信仰者あるいは修行者から職業化した宗教者（住職）への長い系譜を全面的に受けとめながらでも、私は、意図的にでも、宗教家（住職）たるものは、ただちにそうした宗教を生活の糧とする次元から脱却し、超克し、普通社会人の中に対等に存在し、その上で魂への訴えができる精神的自主性を確立すべきだと思う。

ところで、人間は本来やさしさにみち溢れているという性善説に立てば、社会福祉の専門家というのも、宗教家の例と同じような面映ゆさがあるう。なぜなら、何人といえども、人と交流する以上、意識するとしなやかかわらず、社会福祉的なことに常にかかわっていると考えられるからである。つまり、上述の住職像に倣って言えば、たまたま社会福祉活動にやや専門的知識を有したり、実践行動をなすことのできる人間が、すなわち、社会福祉の専門家だというよりほかにと思われるからである。

これでは、専門職としての住職、あるいは、社会福祉関係の専門家の像が極めて茫洋としてしまいが、人間にかかわる仕事、いやその他の専門家にせよ、所詮はそういうところか

らスタートして、いつしか極めて高度で専門的なレベルに達していくのではないかと、私には愚考されるのである。

以上、偏頗な二足の草鞋姿を披露したが、これは、忙しく日常生活を駆け抜けて、十三年半の、いわゆる中間報告である。さて、「棺を蓋^{おほ}いて事定まる」までいかが相成るか、自分自身でも乞御期待というところがある。

今後とも、この私は、慈悲溢れる仏光の中で深く支え続けられるものと、自分自身では確信している。いや時には、真摯に業務精励すれば、私のささやかな行動を通して、社会福祉施設や教区等々の場で、ひとつ、ひとつの花弁がそっと花咲くこともあるのではないかと、ほのかに煩惱をよぎらせることもある。……

明日もまた忙しそうである。

〔一九八三・五十八・九・十五擱筆〕